



JSPS Bonn Office

独立行政法人 日本学術振興会 ボン研究連絡センター
四半期報告
(2006 年 7 月～9 月)

2006 年 9 月 26 日
樋口和憲

ドイツの夏は涼しく短いとよく言われます。ところが、今年はワールドカップの 6 月から猛暑で、9 月に猛暑の再来がありました。元々ドイツの夏は冷房など必要ないほどの涼しさだったはずですが、冷房が必要になってきたのはここ数年のこのようです。地球温暖化で世界各地の氷河・氷床融解現象が報道されていますが、欧州では融解水が北太平洋に広がり淡水の流入で低密度となった海水が深層水の沈み込み口を覆い、深層海流の循環が停滞し、欧州大陸に急激な寒冷の氷期がやって来る可能性があるというのですから、地球という生命体は実に繊細です。

さて、私、樋口は 2 年間の任期を終えて帰国し、10 月 1 日付けをもちまして、日本学術振興会国際事業部研究協力第二課に着任することとなり、私が発行するぼんぼん時計もこれで最後となりました。これまでの皆様のご協力、ご厚情に対し、感謝申し上げます。後任には、ボン研究連絡センター初の女性副所長となる小山佐和さんを迎えます。今後とも引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

1. はじめに - ドイツの知の巨人たちに寄せて

今年7月1日、ハノーファー大学は「ハノーファー・ゴットフリート・ヴェルヘルム・ライプニッツ大学」に名称を変更した。ドイツの万能の知の巨人ゴットフリート・ヴェルヘルム・ライプニッツ (1646年-1716年) 生誕360年にあたり、偉大な先人の名前を大学の冠としたのである。ライプニッツはニュートンと同時代に微積分法、微積分記号の考案、二進法による計算機の考案、論理計算の創始などを行った数学者として知られるが、様々な学問を統一し体系化しようとした卓越した哲学者・科学者であり、同時に政治家・外交官でもあり、またベルリン科学アカデミーの創設者でもある。ドイツの誇るもう一人の万能の知の巨人ゲーテ (1749年-1832年) の一世紀前の先達だ。

それにしてもドイツがこれだけ多数の知の巨人を輩出しているのには驚かされる。これまでも過去の「ぼんぼん時計」でアインシュタイン、マックス・ヴェーバー、ユング (スイス生まれだがドイツの土壌)、ヴェーゲナー、ハイネなどを紹介したが、古くはニコラウス・コペルニクスやヨハネス・ケプラーなど、現代に近いところではグリム兄弟、カール・マルクス、エルンスト・フリードリヒ・シューマッハーなどもいる。さらにゲーテの時代にはアレクサンダー・フォン・フンボルト (1769-1859)、カール・フリードリヒ・ガウス (1777-1855)、イマヌエル・カント (1724-1804)、ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル (1770-1843) など多数の知の巨人が現れている。これらドイツの知の巨人たちが200年ほど前の同時期に生き、どこかで出会い、その時を共有したことを想像するのは心が躍る。最近のドイツのベストセラー『世界測

量 (Die Vermessung der Welt)』は、世界を股にかけたフンボルトと自宅での机上の数学的思索から一歩も外に出なかったガウスという全く正反対の方法で「世界」を測量しようとした2人の物語である。2人は1828年ベルリンのドイツ自然学者会議で出会っているが、それはガウスが初めて故郷以外の土地に出かけたときだったという。一方、フンボルトとゲーテは、ゲーテがイエーナに設立された植物学研究所の監督となったとき、友人のシラーを通じて出会っている。万能の天才レオナルド・ダ・ヴィンチが現れたイタリア・ルネッサンス時代はペストの流行、政争、戦乱の続く波乱の時代であった。遅れてやって来たドイツ・ルネッサンスとも言えるゲーテの時代もまた激動の時代である。時はフランス革命。世界を変革しようとする力が押し寄せ、シラーやベートーベンが自由を謳い、ハイネがドイツ革命を夢見た時代。一方で「世界」が未知で人類の目の前に現れていなかった時代。これら知の巨人たちは世界を変革するよりも前に、「世界」を理解することを目指し、実際に馬車や船で未知の土地や航海に出たり、あるいはまた深い思索の中を旅した。

フンボルトは世界探検の航海の体験を基に、文字通り全世界を理解しようとした大著『コスモス (Kosmos)』で、地球曼荼羅とも言える動植物と環境の全体的関係性を明らかにしようとした。同じように、後にビーグル号で航海に出たダーウィン (1809-1882 イギリス生) は、フンボルトの著書『新大陸赤道地方紀行』を参考にしたというが、ダーウィンが個々の動植物の地域の変化に関心を持ち『種の起源』を著わしたのに対し、フンボルトの関心はあくまで多様な自然の全体的有機的関係性にあった。『新大陸赤道地方紀行』には例えば、「電気と魚」の話がある。フンボルトは無機的な放電現象と、南米の電気ウナギの有機的現象を全く同様の熱狂的関心をもって観察する。フンボルトは地球上の放電、磁気、地震などの無機的現象が、生命と自然という有機的現象にどのような影響を与え、全体としてのどのような有機的関連をもっているのか、常に関心を抱いていたのである。ゲーテも同様に自分自身と自然との交感を通じた体験と感覚を重視する具体的有機的科学的を模索した。

現代の科学者がこのような多様な自然の全体的有機的関係性への関心を失って久しい。それは単に現代の科学が細分化、専門化されすぎたからに過ぎないのだろうか。それとも科学者は多様な自然の全体的有機的関係性などというものは、曖昧で科学ではないと一笑するのだろうか。

ゲーテの後には、生理学者・物理学者でありながら、熱力学・物理学、生理学のみならず、知覚哲学、認知心理学や音響学など幅広い影響を与えた 19 世紀ドイツの知的巨人、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ (1821-1894) がいる。さらに 20 世紀に入ると、ゲーテの思索に大きな影響を受けた理論物理学者ヴェルナー・ハイゼンベルグ (1901-1976、行列力学、不確定原理により量子力学の確立に寄与。1932 年ノーベル物理学賞) がいる。彼によって提唱されたマトリックス力学 (行列力学) は全体性の中であらゆる関係性の可能性を行列を用いて数学的に記述しようとしたものである。それは、全体的有機的関係性を数式化したものだとも言ってもよい。ハイゼンベルグはゲーテと同じように、科学が数式化され、抽象化されていくことに危惧の念を抱いていたが、それでも科学の未来を信じていた。それは単なるコンピューター・シミュレーションの創り出す世界でも、単なる数式化された抽象的理論の世界でもなく、ゲーテやフンボルトが抱いていたような多様な自然の全体的有機的関係性への関心を土台にした科学の未来への希望だった。日本にも、粘菌を通じて南方曼荼羅とも言われる宇宙的広がり思索した南方熊楠 (1867-1941)、文系と理系の融合を試みたと言われる寺田寅彦 (1878-1935) やその弟子の中谷宇吉郎 (1900-1962)、晩年自然科学と決別し「自然学」を提唱した今西錦司 (1902-1992) など、そのような関心を持ち続けた学者がいる。21 世紀に科学が真の意味で飛躍的發展を遂げるとするならば、それはおそらくこのような全体性、関係性の科学抜きにはあり得ないのではないかという気がする。

2. ドイツ連邦レベルでの学術動向

◎ドイツ若手研究者 (後継者) がボストンで会議を開催

http://www.dfg.de/aktuelles_presse/pressemitteilungen/2006/presse_2006_45.html

(DFG プレスリリース 独語のみ Nr.45 2006 年 9 月 4 日)

<http://english.gain-network.org/index.v3page?p=45933> (GAINホームページ)

○2003年にAvH、DAAD、DFGのドイツ学術振興機関が協力して創設した「ドイツ学術国際ネットワーク (GAIN)」がボストンでドイツ人若手研究者の会議を開催した。

GAINはドイツ人研究者の海外「頭脳流出」からドイツへの「呼び戻し」を目的に創設された組織であるが、この創設に限らず、ドイツ学術振興機関が相互に情報を共有し、連携協力を進めている点は他国にないドイツの強みであるように思う。

「ドイツの研究の現状は、ドイツ若手研究者（後継者）にどのような将来展望を与えるのか。」この問いは、北アメリカにおけるドイツ人学者の過去最大級の会議での中心議題である。2006年9月8日から10日にかけて、「ドイツとヨーロッパでの新たなチャンス」というテーマの枠組みで、320人を超える参加者がボストンに集まった。主催したのはドイツ学術組織の共同先導役となる「ドイツ学術国際ネットワーク(German Academic International Network: GAIN)」で、「ドイツ学者機構(German Scholars Organization: GSO) ※注」との共同で行なわれた。

政界からは、文部大臣会議議長ウテ・エルトジーク・ラヴと、BMBF 次官メイヤー・クラマー博士が、学術機関からは、HRK 会長マーガレット・ヴィンターマンテル博士、DFG 会長エルンスト・ルードヴィッヒ・ヴィナッカー博士、AvH 事務総長ゲオルク・シュッテ博士、DAAD 副会長マックス・フーバー博士等が参加する。議題として、ドイツの大学外での研究についてのプレゼンテーション、民間での雇用の見通しや、ヨーロッパの研究室での最近の研究発展についても取り上げられる。マサチューセッツ工科大学 (MIT) でのパネルディスカッションでは、アメリカとドイツにおける学者の自立への新たな道がテーマとなる。

カッセル大の「高等教育研究のための国際センター (International Center for Higher Education Research)」が GAIN の委託により行なったドイツとアメリカの学者の労働市場調査が新たに紹介される。調査結果は研究経歴の展望について、「感じられる」とことと、現実とは大きな隔たりがあることを示している。調査結果によれば、教授の職を手に入れる機会はドイツもアメリカに匹敵するとのことである。

GAIN は、2003 年に AvH、DAAD、DFG により設立された。後に、ヘルムホルツ協会ドイツ研究センター、マックスプランク研究所、HRK も加盟した。これまでの間に、GAIN はドイツ人研究者のネットワーク組織、ドイツと北アメリカとの間の情報仲介組織となった。ヨーロッパでの就職の見通しを示すことは、アメリカで中長期的に滞在することを決めているドイツ人研究者とのコンタクトケアや連携と同様に、組織的テーマとなっている。GAIN は月刊ニュースレターを発行しており、1,500 人の定期購読者がいる。ボストンに新たに GAIN の諮問委員会も設置されたが、これは GAIN の会員の経験や指摘を新たな活動の計画に取り入れること等を目的としている。

※注：ドイツ学者機構(German Scholars Organization: GSO) についてはボンボン時計第10号でもご紹介しているが、米国で研究するドイツ人研究者のネットワーク組織で、一昨年9月に設立している。詳細は<http://www.gsonet.org> (GSOのホームページ) を参照のこと。

◎フンボルト財団が 2006 年ジーボルト賞受賞者を決定

<http://www.avh.de/en/aktuelles/presse/pn/index.htm> (AvHホームページ)

http://tokyo.daad.de/Japanese/jp_scholarship_siebold.htm (DAAD東京)

○7 月 11－12 日にフンボルト財団 (AvH) 年次総会がベルリンで開催された。72 개국 550 名の学術関係者が集まった。AvH が授与するフィリップ・フランツ・フォン・ジーボルト賞の授与式も AvH 年次総会のプログラムの中で 12 日に行われている。

ジーボルト賞は、1978年にドイツ大統領が日本を公式訪問した機会に寄付した基金により設置されたもので、今年で第28回目を迎えた。

ジーボルト賞は、日本の学者を対象とした最も権威あるドイツの賞であると言われ、日独の文化及び社会の相互理解に多大な貢献のあった功績を称え、毎年大統領から直接授与されている。50歳以下の全分野の日本人研究者を対象に、受賞者は賞金5万ユーロ及び一年間のドイツ研究滞在に招待される。

2006年受賞者は、井田良 (まこと) 慶応大学法科大学院教授に決定した。

井田先生は刑法の専門家で、1989年にケルン大学より法学博士号を取得し、ドイツ刑法の一人者であり、法学分野では5人目の受賞者となる。

井田先生はボン研究連絡センターとドイツ同窓会が主催する第2回1997年の日独シンポジウム (日独学術事業懇談会) で「刑法による環境保護 (protection of environment by criminal law)」の題目での講演者であり、当時、井田先生はフンボルト財団奨学生としてエアランゲン-ニュルンベルグ大学に研究滞在をされていた。

日独法学会で要職にあるということではないようであるが、昨年の日本におけるドイツ年記念法学シンポジウム「グローバル化と法」の刑法セッションの講演者でもある。

また、余談であるが夫人はドイツ人である (※)。

補足：井田先生の日独交流への貢献の功績を知りたいと思い、慶応大学のホームページを探してみたが、見つからず、ドイツJSPS同窓会会長のメンクハウス先生 (法学専攻) にお聞きしたりしてみたが、このような賞、特に国際交流に関連した受賞については日本の各大学から積極的に情報発信していただいても良いのではないかと思います。

法学分野では慶応大学とザールブルグ大学の交流が活発で、ザールブルグ大学では「慶応大学の日 (Keio-Tag)」も開催されていると聞き、調べてみたが、これは井田先生とは直接の関係がないようである。これはProf. Dr. Helmut Ruessmannという1992年から「慶応－ザールブルグ同窓会」の要職についたザールランド出身のドイツ人法学者の尽力によるもののようで、ザールブルグ大学で「慶応大学の日 (Keio-Tag)」を1998年、1999年、2003年、逆に、慶応大学でザールの日 (Saar-Tag) を2001年、2005年に開催しており、同氏は2005年に慶応大学から名誉博士号を授与している。だが、慶応大学で行っているザールの日 (Saar-Tag) の開催にはおそらく井田先生も多大なご尽力をされているものと容易に想像できる。

また、日独刑法学の協力はかつてマックスプランク国際刑法学研究所 (在フライブルグ) に日本担当者がいた時代には大変活発だったようであるが、現在このポジションがなくなってしまったとのことで、それ以来、日独刑法学の関係が弱くなってきているとのことである。やはり相手国機関に組織的な専属の日本担当者がいるかないかは大変重要な鍵である。

※：日本での研究滞在期間中に日本人女性と知り合い、結婚されたドイツ人研究者は意外に多く、ドイツJSPS同窓会の中でも日独交流の推進的役割を担っているのはご承知のとおりであるが、同様に、井田先生のように、ドイツでの研究滞在中に出会った (ものと思われる) ドイツ人女性と結婚された日本人研究者は総研大・小平桂一先生 (キール大学理論物理学博士号取得) を初め、数は少ないかもしれないが、国際的な活躍をされているものと思う。

◎フンボルト財団がアフリカとの研究協力強化に向けた提言を発表

Recommendations for more intensive research cooperation with Africa

<http://www.avh.de/en/aktuelles/presse/pn/index.htm> (AvHホームページ)

○フンボルト財団がアフリカ諸国との研究協力強化に関する専門家会合を開催し、7 月 21 日、「知識は発展を生み出す」と題する 11 条の提言を発表した。

知識は発展を生み出す (Wissen schafft Entwicklung)

：集中的なアフリカとの共同研究は持続的な発展への新たなチャンスの扉を開く

1. アフリカの貧困や飢餓、疫病の悪循環を打破するためには、機能的な学術システムの構築及びそれに対する支援が必要条件である。
2. ドイツの発展途上国経済振興政策の中心的な手段としての技術協力及び経済協力は、科学的・技術的な協力を補完し、かつ、「国際科学政策」の一部として戦略的に互いに歩調を合わせなければならない。
3. 「人によって異なる」一質の高い研究者への個別の支援は、組織的な共同研究の出発点としても結果としてもより強力に行なわれなければならない。
4. 特定の重点国、地域及び研究テーマにおける発展と科学的な協力に集中することは、いくつかのアフリカの国々とドイツにおける科学の利益と可能性に対する指針とされなければならない。
5. アフリカの学術システムの弱さを克服するため、また、アフリカからの学術的エリートの流出を防ぐための動機付けが、革新的な協力モデルを拡大することによって作り出されなければならない。
6. 優秀な人材を集め、明確な個性を形成し、ドイツの大学の経済効率を高める過程において、発展途上国の大学との協力を維持、拡大するための動機付けが作り出されなければならない。
7. 自然科学や工学だけでなく、人文・社会科学の研究も、歴史の浅いアフリカの研究者社会において重要な貢献をなしている。
8. アフリカにおける基礎研究の支援は、持続的な研究政策と共同研究にとって必要不可欠な要素である。
9. 共同研究を発展させる効果的な手段として、バックボーンとなるべき学術的フレームワークを作り、維持し、さらに成長させるために、ネットワーク化が促進されなければならない。
10. 学術の自治と効率的な大学管理構造の専門的なシステムを構築すること、及び、研究管理における個々人の能力に対してより強く援助がなされなければならない。
11. ドイツ中規模学術支援機関、国際的な学術交流、共同研究発展に関係する同窓会活動は、よりしっかりと歩調を合わせなければならない。

◎DFG ニューデリー事務所が開設

http://www.dfg.de/en/international/liaison_office/newdelhi/index.html

http://www.dfg.de/en/international/liaison_office/newdelhi/news/index.html

(DFGホームページ)

○ドイツ研究協会 (DFG) が北京、ワシントン、モスクワに続く第四番目の新たな海外事務所としてインドにニューデリー事務所及びハイデラバッド支所を開設する。今年11月4日のニューデリー事務所の開所式に続き、11月5—6日にリンダウ会議参加者の同窓会会合、さらに11月7日にハイデラバッド支所の開所式が予定されている。

今年1月にDFGの前日本担当課長Dr. Gad (DAAD東京事務所勤務経験者) がニューデリーに赴任し、DFGニューデリー事務所開設準備を進めていたが、いよいよ、11月4日に開所式が行われることになった。JSPS本部にも訪問予定のシャバン連邦教育研究大臣もこの開所式に出席する予定で、これに合わせアジアツアーを組んでいる。また、政界からも、AvH、DAADほかドイツ学術関係機関からも関係者が多数、開所式に参加する予定である。

近年、インドからドイツへの研究留学生、研究者派遣が増大し、ドイツとインド研究者の交流が活発化していることから、さらにこの交流の増加傾向に歩調を合わせ、両国の研究環境の意識を拡大することを目的に、ニューデリー事務所が開設されることになった。

ニューデリー事務所は、印独の大学間の情報交換・情報サービス、印独学術協力・ネットワーク形成、機関間協力のさらなる推進、若手研究者の振興などに加え、社会科学・人文分野の二国間協力の強化、ドイツ人研究者のインド訪問の増加、日印研究協力の視覚性 (visibility) の増加などもその任務として挙げている。ニューデリー事務所及びハイデラバッド支所は既存プロジェクトのコーディネート及び支援のほか、互いに相手を賛辞し相乗作用をもたらすよう両国の著名研究者を招き寄せようと努めている。そのため、既存のインド連携機関であるインド科学技術庁 (DST) 及びインド科学アカデミー (INSA) と連携協力を強め、INSA-DFGプログラム同窓会、DST-DFG同窓会 (リンダウ会議同窓会) の組織化を進めている。

補足：DFGの海外事務所は現在4か所であるが、その設置と運営は大変効果的に行われているようで、JSPSの海外事務所や日本の大学の海外事務所のあり方にも参考になるように思われる。私の見たところ、DFGの海外事務所には以下の3つの特色がある。

その一点目は既存プロジェクトの「視覚化 (visibility: 目に見える形で現す)」という点である。

DFGは新たな長期大型共同支援プロジェクトである“Collaborative Research Centre”

(South Asia Institute, University of Heidelberg支援：12年間、15専門分野、17サブ・プロジェクト) を採択し、同プロジェクトは早速この10月にデリーで印独シンポジウムを開催する。DFGのCollaborative Research Centreでは初めての人文分野研究プロジェクトで、DFGニューデリー事務所はインドでの人文社会分野協力の強化、視覚化に力を入れている。この「視覚化」という点は、日本の大学の国際化推進と合わせて、特に長期的な既存プロジェクト・既存協力の「視覚化」をもっと推進できれば良いのではないだろうか。

また、二点目は、相手国対応機関、協力機関との連携・協力という点である。

DFGはワシントン事務所、モスクワ事務所に先立ち、その最初の海外事務所である「独中研究振興センター (Sino-German Center for Research Promotion in Beijing)」を中国国家自然科学基金委員会 (NSFC) と共同で、2000年10月北京に開設している。このセンターは年間予算をDFGとNSFCとで (同等に半額ずつ) 折半して運営し、組織的にも同数の合同委員会代表から成り、このセンターが中心となって独中協力を推進しているのである。DFGは、中国教育省 (MoE) 及び中国科学院大学院大学 (Graduate University of the Chinese Academy of Sciences-GUCAS) との協定合意により、DFGの大学院共同支援 (International Research Training Groups) プログラムの枠組みで2004年に最初の独中リサーチ・トレーニング・グループを立ち上げ、さらに、2005年4月、NSFCとの合意により、独中共同学際研究プログラム (Sino-German Joint Interdisciplinary Research Programmes) の枠組みで共同研究支援を開始しているが、これらの既存プログラムの推進、視覚化をセンターが担っている。

そして第3点目が、対応機関との協力による同窓会の形成・組織化という点である。DFGが著名研究者や相手国対応機関の協力を得て、同窓会を組織化しようとしている点は参考になるかと思う。

先に上げたフンボルト財団のアフリカとの協力提言の中にもあるように、人文・社会科学研究の重要性、同窓会組織発展の重要性などをドイツの学術支援機関はきちんと政策として掲げている。そして、海外事務所の存在は、相手国対応機関との連携、同窓会など現地研究者との連携協力・組織化に欠かせないもので、逆にこの連携関係が強化されなければ、その存在意義は薄れてしまうと思われる。

◎「2006 年ドイツ図書館賞」にコットブス大学図書館が決定

http://www.tu-cottbus.de/cms/index.php?beitrag_id=80008817 (コットブス大学)

<http://www.zeitstiftung.de/home/index.php?lang=en> (Zeit財団)

<http://www.bibliotheksverband.de/2005/home.shtml> (ドイツ図書館連盟)

○ドイツ図書館連盟とエベリン・ウント・ゲルトブチェリウス・ツァイト財団が、2006 年図書館賞の受賞機関を発表した。ツァイト財団は、「DIE ZEIT」新聞の創始者 **Gerd Bucerius** (ナチス体制に反対した弁護士で、1946 年にハンブルグに「DIE ZEIT」を創立) が 1971 年に創設した非営利団体で主として高等教育を支援している。

今回図書館賞を受賞するのは、コットブス・ブランデンブルク工科大学情報・コミュニケーション・メディアセンター (IKMZ) 大学図書館。コットブス・ブランデンブルク工科大学はドイツ東部ブランデンブルク州 (州都ポツダム) の工業都市コットブスにある。映画の街ポツダム/バベルスバークは、映画撮影所、テレビスタジオ、映画テレビ大学、ハイテクセンター、数多くのメディア産業が **Ufa** (ドイツの映画会社 **Universum-Film-AG**: 当時マレーネ・ディートリッヒのような映画スターが活躍) の伝統を受け継いでいる。

授賞理由は、同図書館が情報供給に関して未来志向の統合コンセプトを実現し、マルチメディア化された学問の世界にアクセスするための新しい基準を与えたことが挙げられている。さらに、ドイツ政府が実施するキャンペーン「アイデアの国ドイツ」に参加するなど、多様な活動に従事していることも評価された。コットブス大学図書館は、マルチメディアセンター、計算機センター、経営管理データ処理部門と共に I K M Z の奇抜なデザインの同じ建物の中にあり連携している。

授賞式は、ドイツの「図書館の日」である 2006 年 10 月 24 日に行われる予定である。

◎DFG のヴィナッカー会長が欧州研究評議会 (ERC) 事務総長に任命

http://www.dfg.de/en/news/press_releases/2006/press_release_2006_44.html (DFG ホームページ)

http://erc.europa.eu/index_en.cfm (ERC ホームページ)

http://erc.europa.eu/pdf/press_statement_erc_secgen_300806_en.pdf

○DFG の Winnacker 現会長 (65 歳) が、来年 1 月付けで、新設の欧州研究評議会 (注※: European Research Council : ERC) の事務総長 (Secretaly General) に就任することが決定され、発表になった。Winnacker 現会長は DFG 会長を 3 期 (9 年間) 務め、その DFG 会長の任期での成功と実績がこの人事に結びついたと公表されている。

Winnacker 現会長の ERC 事務総長の職は、2 年半の任期（2009 年 6 月まで）となる予定である。また、Winnacker 現会長の後任となる次期 ERC 事務総長もすでに決定しており、スペイン・カタロニア教育研究大臣・Andreu Mas-Colell が 2009 年 7 月から 2011 年末までの任期で事務総長を務めることに決定している。

注※：ERCは、EC第7次研究フレームワーク・プログラム（2007年-2013年）の一環として設立され、2006年末に欧州議会で正式承認される予定。次期7年間で年間75億ユーロの予算により、欧州研究圏（ERA）をより魅力的かつ競争力あるものとするために寄与することが期待されている。

3. ボン研究連絡センターの活動

◎来訪&訪問、会議出席等

【7 月】

- 7 月 11 日（火） 田中センター長がフンボルト財団年次総会に出席（於ベルリン）
（～12 日）
- 7 月 21 日（金） 樋口が「早稲田大学-ボン大学共同シンポジウム」（応用数学、IT 分野）に出席（於ボン）
- 7 月 25 日（火） Ganter 職員が BMBF 国際交流会合に出席（於ボン）

【8 月】

- 8 月 9 日（水） DFG の Harald Knobloch 氏（研究基盤振興部、研究設備・情報技術部門プログラムディレクター）が来会
- 8 月 14 日（月） 田中センター長が国際天文学会に出席（～20 日）（於プラハ）
- 8 月 18 日（金）
 - ・Ganter 職員、Schulze 職員、伊藤国際協力員、中川国際協力員がフンボルト財団派遣前オリエンテーションに出席（於ボン）
 - ・ドイツ日本学術振興会研究者同窓会幹部とのミーティング。
マールブルク大学・教授 Dr. Heinrich Menkhaus 氏、ケルン大学・教授・Dr. Ingrid Fritsch
- 8 月 23 日（水） 電子マイクロナノテク国際会議（EMNT2006）で JSPS 事業紹介ブース設置（在ボン）（～25 日）
- 8 月 24 日（木） EMNT2006 会議コンファランス・ディナーに樋口が出席
- 8 月 25 日（金）
 - ・DFG の Joerg Schneider 氏（事業基盤振興部若手研究者養成部門・部門長、9 月 1 日付け国際交流部長）が来会
（トップダウン、ボトムアップ助成について調査、意見交換）
 - ・中部大学工学部・堀川直顕教授及び宮崎大学工学部・長谷川武夫名誉教授が来訪
- 8 月 29 日（火） JSPS ボン研究連絡センター年次報告会開催（於ボン）
- 8 月 30 日（水）
 - ・Japan Magazin 編集長・記者来訪（活動紹介インタビュー）
 - ・中川国際協力員がケルン専門大学を訪問（研修課題調査）

【9 月】

- 9 月 3 日 (日) 学振研究協力第二課・小山佐和専門職員が来会。(～9 日)
- 9 月 4 日 (月) 伊藤国際協力員が日独共同大学院・ミュンスター大学-名古屋大学共同シンポジウム出席 (於ミュンスター大学)
- 9 月 6 日 (水) 小山専門職員、樋口、Schulze 職員が DFG との会合
(DFG 国際部長 Dr. Schneider、東アジア課長 Dr. Kruessmann、日本担当 Frau Hesse、Frau Biederbick)
- 9 月 7 日 (木) ・小山専門職員、樋口、Schulze 職員が DAAD との会合
(424 課長 Dr. Toyka-Fuong、日本担当 Frau Eberlein、Frau Hellweg、Frau Moeller)
・小山専門職員、樋口、Schulze 職員が AvH との会合
(アジア課長 Dr. Manderla、選考部 3 課 (物理・工学) 課長 Dr. Belz)
・ドイツ同窓会幹部 (EC 環境研究所リニューワブル・エネルギー・ユニット Dr. Arnulf Jaeger-Waldau 氏) が欧州 JSPS 同窓会幹部会に出席
(於ロンドン)
- 9 月 11 日 (月) 早稲田大学法学学術員学術院長補佐、法学研究科教務主任・胡澤能生教授来訪 (ドイツ大学との大学院連携可能性について調査)
- 9 月 12 日 (火) ドイツ語圏日本研究学会を後援参加 (於ボン) (～15 日)
同学会にて JSPS ボン研究連絡センター主催のレセプション開催
- 9 月 14 日 (木) ドイツ語圏日本研究学会にて、関係機関事業説明会に出席、
樋口が事業説明
- 9 月 27 日 (水) 高野紀元大使来訪
- 9 月 29 日 (金) ・東京大学国際連携本部特任助教授・船守美穂氏来訪
船守助教授、伊藤国際協力員、Schulze 職員がボン大学、DAAD 訪問
(ドイツの大学の国際化調査)
・樋口、帰国

◎JSPS Abend 《学振年次報告会：学振の夕べ》開催

2006 年 8 月 29 日 (火)、ボン市郊外の Bad-Godesberg に位置する<La Redoute>において、当該センターが JSPS Abend 《学振の夕べ：年次報告会》を主催した。<La Redoute>は、かつての選帝侯の歴史的舞踏館である。この催しは、通称 JSPS ゴマーフェスト (夏祭り) とも呼ばれ、ドイツ関係機関の関係者に広く知られている。日ごろ良好な協力関係を保ち、お世話になっている関係機関 (DFG、AvH、DAAD などドイツ対応機関、省庁、高等教育機関、研究機関、研究支援機関、文化団体等) 関係者のうち、ボン近郊に在住・在勤の方々を招待して、当該センターの過去 1 年間の活動を報告するとともに、今後の日独協力の展望を提供し、出席者相互の親睦を深めることを目的としている。今回の出席者の中には、対応機関関係者だけでなく、デュッセルドルフ大学学長 Prof. Dr. Alfons Labisch、ギーセン大学学長でドイツ学長会議 (HRK) 副会長でもある Prof. Dr. Stefan Hormuth、その他、ボン大学、ケルン大学など大学関係者が多数参加し、日独大学間協力について懇談した。

開催にあたって、まず、田中靖郎センター長から、ボン研究連絡センターの活動への協力に対する関係者への謝辞が述べられるとともに、この 1 年間の活動報告および学振の新たな動向を踏まえた今後の活動計画が報告された。続いて、急遽急用で欠席となった

NRW州革新・学術・科学技術省次官Dr. Michael Stueckradtからメッセージが寄せられ、同省国際協力課次長Dr. Martina Munselがメッセージを代読した。また、ドイツ関係機関関係者を代表して、フンボルト財団 (AvH) 事務局長Dr. Georg B. Schuetteが挨拶後、日独協力、日独交流のさらなる発展を祈念して乾杯の音頭を取った。また、樋口が任期を終え帰国するため、2年間のドイツでの体験を振り返って関係者への謝辞を述べ、後任の小山氏への変わらぬ支援をお願いした。今年も100名を越える参加者が集い、日独研究協力の展望を語り、また学振の新たな動向を理解してもらい、懇親を深める貴重な機会となった。

◎ドイツ語圏日本学研究デー参加

8月12日ー15日、ボン大学内で「第13回ドイツ語圏日本額研究デー」が開催された。ドイツ JSPS 同窓会のメンクハウス会長が、このイベントを企画するドイツ語圏日本学会の理事になっていることもあり、全期間、会場に JSPS のインフォメーション・ブースを出展し、JSPS の事業を周知することができた。

12日のオープニングでは、ボン大学から Prof. Dr. Matthias Winiger 学長、日本大使館から水谷公使、ケルン日本文化会館から本間館長がそれぞれ祝辞を述べ、日本から上智大学の栗城壽夫教授 (憲法学) が基調講演「日本における憲法改正の現状」を行った。また、12日には、このイベントに参加する元 JSPS フェローを招待したボン研究連絡センター主催のレセプションを実施した。このレセプションには、元フェローと関係者、約30名ほどが集まり、ドイツ JSPS 同窓会の可能性や日独協力の推進について懇親を深めた。早速、参加者の中から数名の新たな同窓会会員が入会登録した。また、日本学研究デー参加者の元 JSPS フェローで未会員の者には再度、郵送でドイツ JSPS 同窓会案内を送ることにしている。

また、14日夕刻にはドイツ語圏日本学研究デーでの関係機関事業説明会があり、AvH、DAAD、ドイツー日本研究所 (DJI)、国際交流基金、JSPSがそれぞれの奨学金・事業説明を行った後、ドイツ語圏日本学会、日本大使館、デュッセルドルフ総領事館、ボン大学共催の全体レセプションが行われた。

事業説明会には、日本学研究デーの参加者50名程度の参加があり、日本への奨学金提供機関が一堂に会して日本への奨学金やファンドを説明することができ、大変有意義な機会となった。

◎早稲田大学-ボン大学ジョイント・シンポジウム出席

7月21日ー22日、早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構及び早稲田大学21世紀COE (実践的ナノ化学教育研究拠点) 並びにボン大学生命医科学研究所 (Life and Medical Sciences Bonn : LIMES) 及びボンアーヘン国際ITセンター (Bonn-Aachen International Center for Information Technology : B-it ※注) のLife Science Informatics部が共催し、早稲田大学ヨーロッパセンター (ボン在住) の協力によるジョイント・シンポジウムが、ボン市内B-ITキャンパスで行われた。

このシンポジウムは早稲田大学21世紀COE (実践的ナノ化学教育研究拠点) の研究メンバーでもある朝日透先生 (生命医療工学研究所、大学院理工学研究科ナノ理工学専攻

(兼任)・教授)が今年2月にボン大学を訪問した際、計画が持ち上がり、実現したものである。

今回の早稲田大学とボン大学のイベントは今後どのような分野で共同研究が可能か、将来的な共同研究をどう進めていくかということを考える立ち上げのためのワークショップで、早稲田大学側は先端科学・健康医療融合研究機構の若手研究者(講師レベル)を主体に9名が参加した。また、ドイツ側からは上記LIMES、B-IT及びボン大学医学部を主体に12名が参加し、双方の研究紹介の後、活発な質疑応答が行われた。シンポジウム後のミーティングでは、今後の連携についてさらに前向きな議論がなされるなど、今後の連携の可能性が検討された。

注※：ボン・アーヘン国際ITセンター(B-IT)は2002年10月に開設されている比較的新しい組織であるが、アーヘン大学とボン大学が共同で管理運営しているユニークな組織である。設立予算はノルトライン・ヴェストファーレン(NRW)州と連邦政府とが半々で提供している。首都のベルリン移転が1999年夏に完了し、その後ボンは学術都市として、学術機関の誘致や建設に連邦政府からの優遇措置を受けているが、その一環でもある。

B-ITは開設以来、3つの国際マスタープログラム(Media Informatics, Life Science Informatics, Autonomous System)を提供し、さらにInternational Program of Excellence in Computer Scienceを提供しているが、昨年は41か国から180名の学生を受入れている。そのうちの大多数は中国、パキスタンなどを中心とするアジアからの学生で、ドイツ人学生は10%、日本からは残念ながらゼロであるという。

補足：現在、ボン大学の応用数学分野は、ドイツの新しい大型助成プログラム「エクセレンス・イニシアチブの大学院博士コース設立・支援プログラム」の第一次募集最終選考39候補のうちの1つとして残っている。第一次募集では39候補のうち20大学(大学院)がこの10月に最終選抜される予定であるが、ボン大学関係者の話によれば、最終選抜されれば、新たに200人の大学院博士コースの大学院生を支援することになり、既存の施設ではとうてい対応できないため、ボン市内に新たな教育施設を設立する準備計画を進めているという。

また、関係者はDFGとJSPSの日独共同大学院支援プログラムにも大変関心を示し、今後ボン大学の当該分野で大学院博士コースが設立されれば、共同申請も検討していきたい意向のようであった。

早稲田大学にはボン・ヨーロッパセンターがあるが、事務所の維持はやはり大変で、JSPSボン研究連絡センターへの移転、施設利用の話があったときに検討したという。しかし、早稲田大学とボン大学は学生交流も歴史があり、大変活発なため、ボン大学に認知されボン大学に近い現在の場所周辺を動くのは得策でないと判断したようだ。

早稲田大学ヨーロッパセンターは事務所借料・維持費が年々高くなり、やむをえず、事務所を大幅に縮小し、最近、近くの廉価な場所に移転している。

また、余談であるが、早稲田大学が21世紀COEを「スーパーCOE」と呼んで紹介していたのは興味深かった。確かに今ではCOE(Center of Excellence)という言葉は当たり前のように普通に使われているので、対外的・国際的にはその方がインパクトがあり、具体的イメージをつかんでもらえるのかもしれない。

◎第 6 回電気化学、マイクロ・ナノシステムテクノロジー国際会議 (EMNT2006) 出席

8 月 23 日から 25 日まで、第 6 回電気化学、マイクロ・ナノシステムテクノロジー国際会議 (EMNT2006) がボンの開催され、世界各地から約 100 名が参加したが、当事務所からブースを出展し、コーヒーブレイク・ポスターセッション時に学振事業説明を行った。

当国際会議は、国際電気化学学会 (International Society of Electrochemistry) により主催されているが、当学会は日独二国間の協力をベースとして設立されている。当会議も 1996 年の第 1 回デュッセルドルフで開催された会議から第 6 回目になるが、これまで、いずれも日本かドイツで開催されている (1998 年東京、2000 年ガーミッシュ・パルテンキーン、2002 年デュッセルドルフ、2004 年東京)。

今回の第 6 回会議はドイツ JSPS 同窓会のメンバーである Prof. Dr. Achim Walter Hassel (Head of Research Group Electrochemistry and Corrosion, Max-Planck-Institut für Eisenforschung, Dusseldorf) が組織委員会議長を務めたこともあり、当事務所からブースを出展し、参加者へ事業説明を行う機会を得たものである。Prof. Dr. Achim Walter Hassel は大変活発なドイツ JSPS 同窓会のメンバーでもあり、同氏の主導で、同窓会の活動紹介用プレゼンテーションも昨年完成している。また、昨年の第 10 回日独シンポジウム (「日独学術協力の展望」ボン開催) で、Prof. Dr. Achim Walter Hassel と本会外国人特別研究員フェローシップでの日本での受入れ研究者である北海道大学大学院工学研究科・工学部・瀬尾眞浩教授がカップルでその共同研究の歩みと成果発表を行っている。24 日夕刻に開かれたコンフェレンス・ディナーでは、「EMNT の父」と称され、昨年 3 月に亡くなった Prof. Joachim Walter Schultze の追悼を兼ねた EMNT の歴史の紹介、ポスターセッションの授賞式などが行われた。

当日は Prof. Joachim Walter Schultze と共に EMNT の開催・発展に尽力された早稲田大学理工学術院・逢坂教授や北大・瀬尾教授をはじめ、早稲田大、北大、工学院大、首都大学東京、物質材料研究機構などから多数の日本人若手研究者が参加し、ポスターセッションで発表していた。日本との共同研究を行っているドイツ人研究者も多数参加しており、学振事業に高い関心を示した。

また、9 月 27 日-29 日には、日独電子化学会議がミュンヘンで開催される予定であり、当該分野の活発な日独協力の現状を知る大変良い機会となった。

◎その他の活動

- ・ 日本学術振興会パンフレット等の対応機関等への配布
- ・ 情報提供ホームページ” forschen-in-japan.de ” の拡充作業
- ・ ドイツ語版ニューズレター (ルンド・シュライベン) 等の作成・配布
- ・ 各種照会、各種情報収集・調査、各種情報提供業務
- ・ 日本学術振興会事業の広報 (資料出展、HRK ニュースレター掲載ほか)
- ・ ドイツ訪問者に対する便宜供与、訪問アレンジ
- ・ 日本におけるドイツ年記念・日独学術シンポジウム (2005 年 9 月東京開催) 報告書作成準備
- ・ 第 3 回日独コロキウム (2006 年 2 月開催) 報告書作成準備
- ・ 第 10 回日独シンポジウム (2006 年 4 月開催) 報告書作成準備
- ・ 第 11 回日独シンポジウム (2007 年 5 月開催予定) 開催準備

- ・ 第 4 回日独コロキウム (2006 年 11 月開催予定) 準備
- ・ JSPS ボン研究連絡センター年次報告会 (2006 年 8 月開催予定) 準備

4. 今後の予定

2006 年

- 10 月 2 日 (火) ドイツ JSPS 同窓会幹部会合 (於コンスタンツ大)
- 10 月 3 日 (水) 小山佐和・新副所長着任
- 10 月 5 日 (木) 元 JSPS ボン研究連絡センター・センター長・新井栄一氏来訪
- 10 月 6 日 (金) ・アーヘン工科大学-慶応義塾大学交流協定 50 周年記念式典、ラウン
ドテーブルディスカッション及びバンケット出席
(於アーヘン工科大)
- ・第 2 回 DFG・IRTG 会合 (於ベルリン)
- 10 月 10 日 (火) 田中センター長が AvH フェローシップ選考会に出席
- 11 月 2 日 (木) 日独先端科学シンポジウム (JGFoS) (JSPS-AvH 共同主催)
(於ハイデルブルグ) (～5 日)
- 11 月 10 日 (金) ドイツ JSPS 同窓会主催「会員のための会員の招待」及び JSPS 事業等
説明会開催 (於デュッセルドルフ) (～11 日)
- 11 月 18 日 (土) 第 4 回日独コロキウム (ロボティックス) 開催
(於ミュンヘン) (～20 日)
- 11 月 22 日 (水) フンボルト財団主催派遣前オリエンテーション (於ライプツヒ)

2007 年

- 5 月 11 日 (金) 第 12 回日独シンポジウム (気候変動) 開催 (於バンバーグ) (～12 日)